

DSDs（体の性の様々な発達）についての報道ガイドライン

1. 用語について

- 避けるべき用語
 - 「半陰陽」・「両性具有」など「男でも女でもない」を連想させる用語（差別用語として忌避されています）。
 - 「インターセックス」（海外でも大多数の当事者はこの用語を忌避しており、日本ではさらに「セックス」との用語が性行為を連想させるため）。
 - 「性分化疾患」：正式な医学用語ですが、単一の体の状態であると誤解されること（実際には先天的に膣や子宮のない女性や尿道口の位置が異なる尿道下裂の男児などを含めた、約30種類ほどの様々な体の状態がある）、「疾患」との言葉の響きが強いこと、日本ではやはり「男でも女でもない」という誤解が広がっているため。
- 推奨される用語
 - 「**体の性の様々な発達状態（DSDs：性分化疾患）**」（Differences of sex development）
いくつかの体の状態があることを示唆できることと、安易なステレオタイプ化を避けることができるため、近年の海外で医学領域でも使用されるようになっていきます。
- セメンヤさんが被っている問題について言及する場合、推奨される用語
 - 「**DSDsで高アンドロゲン状態の女性選手**」
DSDsは様々な体の状態があり、女性のDSDsでも高アンドロゲン状態は一部の体の状態に限られるためです。

2. DSDsの定義について

- 避けるべき定義
 - 「男女両方の特徴を持った」「男女判別できない」「男女の定義ができない」「男女統一されていない」など、「男でも女でもない」「中性」を連想させる定義。「性自認」の問題とする定義
- 推奨される定義
 - 「**これが女性・男性の体とされる固定観念とは生まれつき一部異なる女性・男性の体の状態**」
 - 「**外性器や内性器，染色体の構成，性ホルモンの産生量など，いわゆる「体の性の作り」が，一般的な発達とは生まれつき一部異なる女性・男性の体の状態**」
 - （セメンヤさんの体の状態の場合）「**アンドロゲン（テストステロン）値が高い女性の体の状態**」（「男性ホルモン」との用語は避けていただきたいです。→「男性に多いホルモン」など）。

3. 内容の取扱について

- 避けるべき内容

- 「男女の境界を問う」「性はグラデーションである」「男女は二分できない」「男・女の2つだけではない」「第三の性別を認めるべき」「性は多様である」「性自認・性的指向（LGBTQ 等性的マイノリティのみなさん）の多様性」「性について議論するべきである」
- （キャスター・セメンヤさんについて）「男女競技の別をなくすべき」「テストステロン値別にすべき」などの議論。セメンヤさんの染色体や性腺について直接に議論すること。（現在はあくまでアンドロゲン値についての議論になっています）。

近年の調査で、ファンタジーではない、DSDsを持つ現実の当事者の大多数は、自分が男性もしくは女性であると感じるかどうかさえほとんど全く疑いを持ったこともなく、むしろ他人が自分を完全な男性・完全な女性として見てくれるかどうか不安に思っていて、切実に自分をただの男性・女性と見てほしいと思っているということが明らかになっています。

また実は、大多数のDSDs当事者は、自分を性的マイノリティの皆さんの一員とは全く考えていないということも、人権先進国であるオランダやベルギーの公的機関の調査でも明らかになっています。

ですが実は大変残念ながら、LGBTQ 等性的マイノリティの皆さんや支援者の皆さんでも、実社会と同じくDSDsに対する誤解や偏見が大きく（50年前LGBTQ 等性的マイノリティの皆さんへの偏見・誤解を一般社会の方が持っていたのと同じく、LGBTQの皆さん自身がDSDsに対して誤解や偏見を現在も持っている状況とお考えください）、誤った形でのDSDsの説明が一般社会に伝えられてしまっているという状況です。

DSDsを持つ人々の大多数の体験は、たとえばがんや事故で自分の子宮や卵巣を失った女性や外性器を損なった男性の体験と同じで、そういう人々をもって「性自認の話」「男女の境界を問う」などの議論は、「女性・男性とは言えない」「自分で女性だと思っているからそう認めてあげます」などの含意を与え、むしろ大多数の当事者の心を大きく傷つけることになります。

またDSDsは生殖器という非常に私的でセンシティブな領域の話になり、そういう領域について「社会的議論」をされるということ自体が、社会的なトラウマ体験になりかねません。

特にキャスター・セメンヤさんに対しては、彼女が「自分は女性である」と明言しているにもかかわらず、「男女の境界を超えた人」のような不本意な議論がされることもありました。

DSDsを持つ当事者のみなさんは、「男でも女でもない」という社会での偏見誤解も相まって、海外の疫学調査では、自殺念慮率が45%にも登るとされています。LGBTQ 等性的マイノリティのみなさんや、女性・男性の差別問題について問うていくことはとても重要なことですが、DSDsをもってそういった「議論」の話とすることは、どうか避けていただきたいと思います。

• 推奨される内容

- 「女性でも男性でも様々な体の状態がある」「“男でも女でもない性別”ではない」など、DSDsに対する社会的偏見や誤解を払拭していく内容を、どうかお願いいたします。
- 現実には生きている当事者家族が励まされるような内容を、どうかお願いいたします。
- セメンヤさんについて：CASの「合理的で必要な差別」といった議論を人権の問題として捉え、彼女のひとりの女性としての人間としての尊厳を護る内容を、どうかお願いいたします。

(資料)

オランダ社会文化計画局報告書 (2014)

- まずなによりも、インターセックス／性分化疾患という概念に基づく**全体的アイデンティティやコミュニティは、実質上存在しない**
- インターセックスの状態／性分化疾患を持つ人々は一般的に、そのようなひとつの集団の一員であるとは感じておらず、**男性・女性以外の別のカテゴリーと見なされたいとも望んでいない。**
- **むしろ彼ら彼女らの望みは、ただの男性・女性として見てもらうこと。**
- 支援者や社会学の研究者は、人間の体の性、ひいては男女の性別の二分法に疑義を唱えている。しかし、本調査でインタビューを受けたDSDsを持つ人々自身は、 [...] **男女の二分法を打ち崩したいという希望を全く持っていない。**
- **それどころか、自分が男性もしくは女性であると感じるかどうかさえ、ほとんど全く疑いを持ったこともない。むしろ、他人が自分を完全な男性・完全な女性として見てくれるかどうか不安に思っている**
- 可視化と意識化がDSDsを被差別的な社会的カテゴリーや集団と見なされるようになる危険性につながり、インタビューの大多数は、これを望んでいなかった。



Living with intersex/DSD



An exploratory study of the social situation of persons with intersex/DSD

The Netherlands Institute for Social Research(2014) Living with intersex/DSD An exploratory study of the social situation of persons with intersex/DSD

オランダ社会文化計画局報告書 (2014)

- LGBTを代表する利益団体やその他の人権団体は、LGBTという略称に、インターセックスの「I」を加えることが多くなっている。
- しかし、当事者のほとんどが、**自分たちはLGBTなど性的マイノリティの人々とは完全に異なる集団であるのに、混同されることが多いため、彼らとは距離をとることを望んでいる。**
- **性的指向または性別同一性と関連づけられるのは、不運なこと、もしくは同意しがたいものだとして体験されている。**なぜなら、DSDsを持つ人々の [...] ほとんど全ての状態で、性的指向・性別同一性とは直接的な関係は無いからだ。
- DSDsを持つ人々が出会った**偏見**には次のようなものがある。
 - **DSDsを持つ人々は何が「男性と女性の間」である。**
 - **完全な男性・女性ではない。**
 - **彼ら彼女らは同性愛、トランスジェンダーだ。**
 - **皆、曖昧な性器である。**



Living with intersex/DSD



An exploratory study of the social situation of persons with intersex/DSD

The Netherlands Institute for Social Research(2014) Living with intersex/DSD An exploratory study of the social situation of persons with intersex/DSD

ベルギー国家機関報告書（2017）

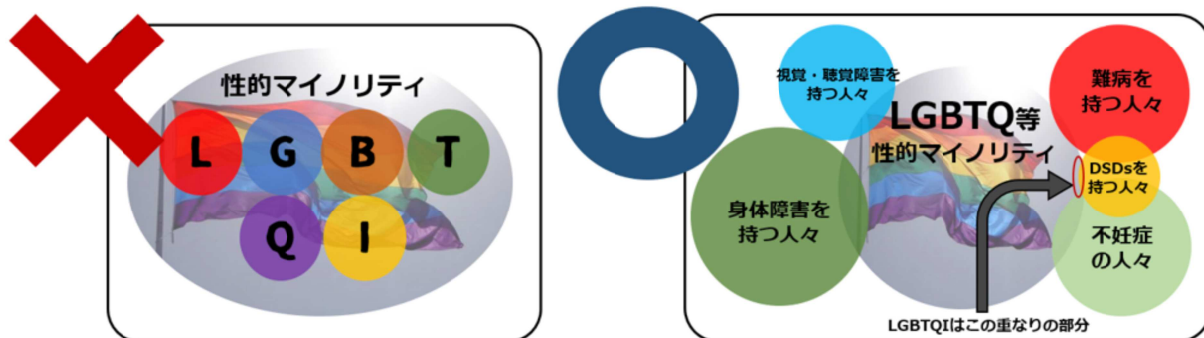
- 調査参加者および子どもたちは皆、**自身を明確に男性／女性と認識している**。
- この事実は、インターセックス／性分化疾患についての最大の神話の一つ、すなわち、**こういう体のバリエーションは男性・女性ではない（Xの）集団である、第三の性別のカテゴリーであるという神話を、直ちに否定するものであった**。
- そういう神話は医療提供者やマスコミ、学校の教師によってもさらに強められていることもあった。
- 彼ら彼女らはむしろ、**自分が資格十分な男性もしくは女性であるか？という自己イメージに、極めて大きな痛みを感じている**。



- 現実の成人当事者や子どもたちは、**自分の体験を、性別違和ともトランスジェンダーの人々の体験に近いものともカテゴライズしておらず、生物学的な背景の本質的な違いが強調されていた**。
- LGBTの人々との関連付けはとてもセンシティブなものであるため、**LGBT傘下の集団との殊更な関連付けは、この対象グループの社会的／医学的困難を理解したり改善するのに役立つとは考えられなかった**。

Nina Callens(2017)SAMENVATTING INTERSEKSE/DSD IN VLAANDEREN⁴⁶

LGBTQ等性的マイノリティの人々との実際の関係

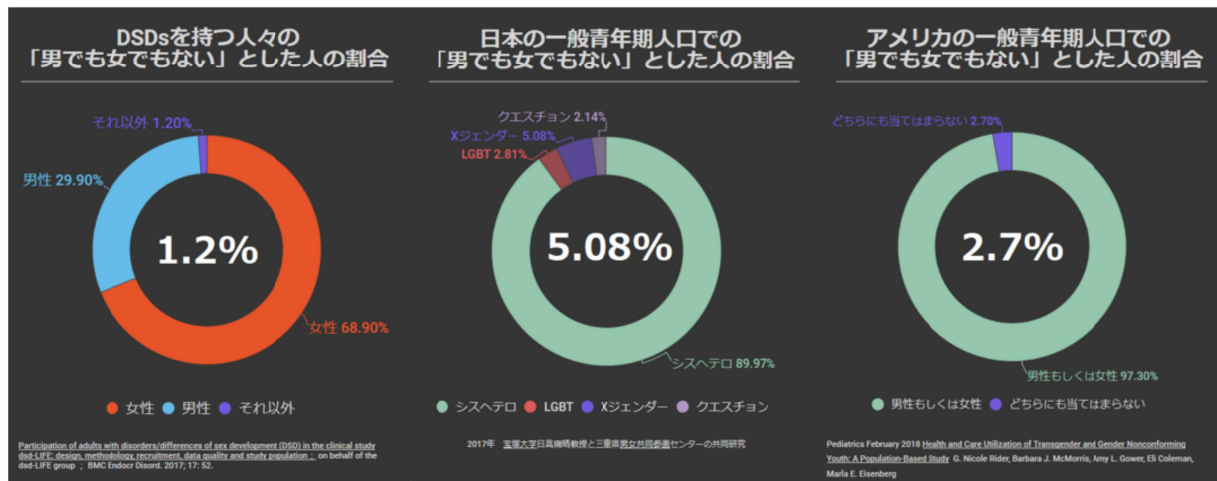


- 「DSDsを持つ人々の [...] ほとんど全ての体の状態で、性的指向・性別同一性とは直接的な関係は無い。」
- 「性自認が曖昧な人は、LGBTの人たちとの繋がりをいくらかは感じているが、**こういう人の数は限られている**。」

（オランダ社会文化計画局：2014）

- DSDs当事者の現実の体験は、事故や病気で性腺や子宮、外性器を失った人の体験に近く、そういう人々が自身をLGBTQ等性的マイノリティの一員とは考えないのと同じ。
- 内外性器の構造の違いによって、女性・男性としての自尊心を損なわれている状況で、性別同一性・性的指向と混同されることは侵襲的・侵害的体験となるため。
- 差別的意識ではなく、欧米の各種DSDsサポートグループでも、LGBTQの人々を包摂している。

性分化疾患を持つ人々と一般人口での、自分を「男でも女でもない」とした人の割合



- DSDs当事者は、自分が男性もしくは女性であると感じるかどうかさえ、**ほとんど全く疑いを持ったこともない**
- むしろ、**他人が自分を完全な男性・完全な女性として見てくれるかどうか不安に思っている**
- **メディアやアカデミズムでは、社会の男女二元制度の意味の無さを表すために、DSDsが引用されることがあるが、当事者の大多数は、男性と女性の区別について疑問を投げかける必要性も感じていない**

オランダ国家機関調査報告書（2014）



社会のセンセーショナルな反応

メディアや社会（教科書も含む）で、この話の単純化しすぎたイメージ化やステレオタイプ化（「インターセックス」という用語で語られることも）がされることは、自分の体の状態をオープンにすることには全くならないと考えられており、これは他の複数の調査でも示されている。

(Nina Callens, 2017)

- （メディアで取り上げられる際でも）**何人かの当事者によって誤った説明がされることがあり、この障害の本質を捉えたものではないことがある。**（Nina Callens, 2017）
- 染色体の構成や性腺の違い、外性器の形状が関わるDSDsの場合、ステレオタイプな「両性具有イメージ」が暴力的に投影される。
- 特定のイメージが投影され、そのイメージに対する**愛好・嫌悪が優先される。**（オリエンタリズム的状況）

テレビ局から質問依頼があって。私は参加しませんでした。だって何がしたいの？って思ったから。手術についてとか、男性と女性の境界についての質問でした。「ちがう、そんなことじゃない」と思って。ああいうのは、『見世物小屋』にしかならないんです。

CAHを持つ女性

「インターセックス」という言い方では、理解の助けになんか全然ならないです。「インターセックス」だと、あなたは2つの性の間にいるってことになる。そういうイメージがまた広がってしまうんです。

CAISを持つ女性